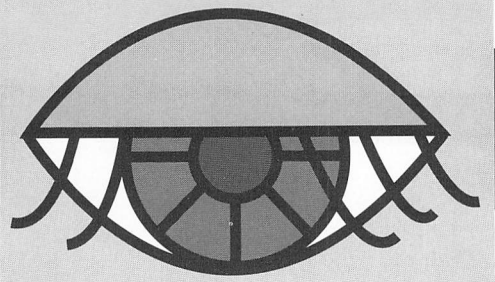


FAME Report



京都ノソキ見トピックス

秋の夜長に、耳を澄ませば 聞こえてくるのはなんだろう？ アジアの民族楽器を見直すくろく百千足館の優雅な試み。

取材・文／大音美弥子 写真／内藤貞保



渾いた空を、見上げて
いるのはだれだ？ 都会の喧
噪にうんとこ揉まれて、見
失っているのは自然により
近い音楽。

四条烏丸に近い新町通
りの百千足館も、昼間の
にぎやかさは、よそと変わ
らない。が、いったん日が
沈むと人通りはまばらにな
り、路地を抜けた母屋で
は季節の移り変わりを十分
に愛でることが出来る。昔
ながらの京の町家は、表通
りに面した店の横を細い路
地が突き抜け、その奥に家
族の住む母屋があった。こ
の方式なら、人通りの多
い場所にあっても騒音は奥
まで届かず、家族は安心
して暮らせる。古くから栄
えた都市の、住民の知恵
と呼ぶべきだろう。

そんな恵まれたシチュエ
ーションを生かして、自然
の音楽への回帰を呼びかけ
るのが、くろく主催「京
町家能舞台」コンサート
のシリーズだ。毎週火曜の
夜、母屋の2階にしつら

えた能舞台で民族楽器を
演奏する試み。9月は場
琴、シタール&タブラ、尺
八&バンジョー、筑前琵琶
&二胡…と4組のアジ
ア音楽が披露された。

写真は、第2週に行な
われた北インド古典音楽を
演奏するシタールの井上憲
司とタブラの逆瀬川健治。
いずれも響きを重視する楽
器なので、能舞台との相
性は抜群だ。ラビ・シャン
カールで有名なシタールは
琵琶や三味線の元祖とも
言われ、独特の官能的な
音色にファンも多い。タ
ブラのほうは左右一対のパ
ーカッションで、叩き方によ
って音階が叩き分けられる
アレと言えは、お分りだろ
う。

酒を片手に、50畳の広
間でシタールとタブラが織
りなす神秘的な即興演奏
を聞くのは、実にマハラジ
ヤ的な快楽。秋の夜長は
いろんなものに耳を澄ませ
る時間なのだ。

くろく百千足館の能舞台では、毎月定期能も行なわれている。こちらは南巫会席膳をしたためながら…の豪華版。